

ある新宗教女性布教師の生活史

——信念体系受容過程を中心に——

磯岡 哲也

1. はじめに —— 目的と方法

人はなぜ新しい信念体系を受け入れるのか。宗教社会学では従来より、様々な信念体系受容の説明理論および仮説が提示されてきており、かつその検証の蓄積も進められつつある。そして、それらの多くは受容者を集団のレベルでとらえ、主として彼等をとりまく社会的状況や、それから導き出される問題状況、さらにはその問題に対する布教者側の意味付与の内容とその能力等に着目するものであった。新宗教への入信及び運動と組織の発展の要因を社会変動論とのかかわりで量的に分析し説明しようとするモチーフがそこにはあったからである。受容の問題を個人のレベルでとらえる場合でも、剝奪理論や激変理論等、社会変動の影響の個人への波及という視角からの説明が多かったように思われる。その際の根拠となる資料としては、その個人の出生年代や定位家族、職業、生殖家族、親族、各種集団や地域社会とのかかわり方などの基礎的な事実と、受容の契機についての本人の回想、そしてその人物を熟知している別のインフォーマントへのインタビューによる当時の状況などの諸事実があげられよう。さて、ここで問題になるのは、本人の回想である。新しい信念体系の受容は、主観的現実の変更すなわちバーガー流にえば「意味システムの変更」あるいは「態度変更」をとまなうので、過去への回想は変更後の意味システムからの解釈が混入してしまうのである。また受容時に近い時期における、入信契機の自己表現は、具体的・個別的・感情論的であるのに対して、時間が経過するほ

ど、抽象化・一般化・合理化しときにはドラマチックな要素が入る傾向がある。

本稿の目的は、受容者本人の回想による受容過程の理解の問題について考察することである。方法としては、「口述の生活史」²⁾を採用した。話者には「入教³⁾の動機」ということで自由に口述してもらい、筆者はそれをできるだけ正確に記述しようとした。同時に従来からの仮説を頭の片隅に置きながら、調査者としての立場から再解釈しようとした。

本稿によって明らかにされるのは、個人による受容にかんする自身史への意味づけのあり方やその変化、新しい意味世界・状況に対して主体的に取り組むための適応ストラテジー⁴⁾のありよう、重要な他者との相互作用によって個人が自律化していく過程等のありのままの姿などであるが、さらに「人はなぜ新しい信念体系を受け入れるのか」という冒頭の疑問についての、社会変動論に代表されるこれまでの諸仮説が、この一生活史の事例に対して有効であるのかどうか、またどう付け加えあるいは変更できるのかといった社会学的課題にたいする示唆を本稿は有するのかどうかとも合わせて明らかにされよう。

話者は円応教布教師谷尾かよである。かよは昭和六年十二月六日、三重県飯南郡森村（現在飯南郡飯高町森地区）の上岡音松とくにゑの第一子として生まれた。かよの下には妹が四人、弟が二人生まれた。十八歳の時、肋膜炎にかかり、大学病院に通院のため名古屋の叔母（母の妹）のもとに移った。名古屋でのかよの闘病生活は十年にわたった。寝たり起きたりの長い生活は、彼女から青春時代の楽しみを奪っていった。主治医から精神の安定のために信仰を勧められたのが、宗教に近づくきっかけとなり、不動信仰、龍神信仰、天理教などを遍歴した。昭和三十四年、二十八歳の時小康をえた彼女は、静養のため郷里に戻った。翌三十五年、かよの病弱克服を契機に既に円応教に入教していた音松の勧めにより、初めて円応教飯南布教所を訪れている。まもなく、鳥取出身で土建業の監督として森にきていた谷尾英逸と結婚する。その後、夫の問題で布教所に通うようになる。昭和三十八年一月十日、長男の輝光を出産する。そして、同年十月五日に、当時飯南布教所責任者の西垣秀子の紹介で入教している。四十年九月二十日には次男の義隆出生。そして、五十七年七月には布教師となり、現在飯南教会の主力メンバーの一人である。

彼女と筆者とのかかわりは、昭和五十九年の十一月五日と六日に筆者が西垣教会長夫妻の世話で円応教本部の例月祭を見学に行った際、行動を共にし、個人的に体験談を聞いたことから始まった。以来、飯南教会を訪れるたびに話を聴くことができ、親しく交流してきた。今回の聴き取りは、円応教飯南教会にて昭和六十年十月十八日～二十日にかけておこなったものである。

円応教飯南教会は、三重県飯南郡飯高町森の西垣秀子教会長宅におかれている。円応教の地域社会への伝播・浸透・定着過程については別稿を用意しているのでそちらに譲るが、生活史理解のためごく簡単に説明する。秀子は昭和三十一年、京都西陣教会に通っていた夫勝の姉、谷口たかの紹介で入教する。その後西陣教会教会長日下正子は、布教のため定期的に森に足をはこんだ。しだいに入教者も増え、昭和三十六年西垣宅が西陣教会飯南布教所となり、秀子が責任者となった。昭和四十二年円応教飯南教会が発足し、秀子が教会長に就任する。現在森地区の信者数は約百五十名で同地区住民の割以上に達し、地域社会に定着した教会といえる。

生活史の記述にあたっては録音を文字化し、ある程度整理して小見出しを付けた。表現、言い回し等も話者が語ったとおりである。語られた出来事の時系列配列もあえてしなかった。半生史というような長期間の内容ではなく、入教の契機を語るという形で設定されたこと、語りの順序、繰り返しも意味のあることと判断したことがその理由である。またカッコを付したものは、理解を助けるための筆者の補足である。

2. 飯南教会布教師谷尾かよ生活史

病気がちの青春時代

やはり何か事情が無いことには手を合わさんと思います。私は体が弱かったですね。十八のとき肋膜炎やりましてね。それから体が弱くて十年間患ってますね、手を合わせたのはそれが動機ですね。円応さんでなくて十年間は他の宗教におすがりしておりました。お不動さんとか龍神さんとかそれからまあ御先祖さんはもちろんのことですけどねえ、そして天理教の初席にはこばせてい

ただいておりますしね。龍神さんといひますのは白龍さんです。八房龍神さんといひましてね、昔名古屋の北練兵場にありました。そこの蛇塚というところに塚があるそうです。叔父（母親の妹の夫）が信仰しておりましたね、北練兵場に勤めておりました、そしてその管理をさせていただいたのが私の叔父さんでした。そして終戦とともに預ける方がなくて「預かってくれないか」といってこちら（名古屋）へ……、そして自分の家でお預かりしましてね。いまでも自分の家で預かっております。これは兵器場の御守護の神様です。

それでぼつぼつこれで体も自信ついてきたし、病気もよくなったから、田舎にかえって静養しなさいってお医者さんにいわれて、それでこちらにきました。それでこちらでお医者さんにかかっておりましてね、そして私は弱いからいまでも病気して寝たり起きたりしてお医者さんのお世話になっておりましたでしょ、それがつらくてお父さんとお母さんが、この西垣先生にお世話になるようになって、御参りさせていただいたのです。そしてたまに（私がいた）名古屋に来て、四～五日いました時にね、「円応さんという不思議な神さんがあってなあ」ということをよくお父さんもお母さんも言ひましてね。それまで円応さんっていうの聞いたこともなかったですしね。不思議だな、役行者だろうかな、なんだろうか言ひてね。いろいろな想像してましてね、そこで私（森に）帰って一年ぐらいね、お父さんに「（布教所の西垣先生のところへ）一回来い来い」言われてね、でもどこの神さんおすがりしたって同じことだと思って私、「行かん」って強情張りましてね。「救うていただけるものならどんな神さんでも救うていただけるわ」言ひてね。それから自覚反省懺悔文を家でやり始めたのです。それが（私の）寝ている座敷の頭の上でやるんですわ。「うるさいっ、やめといて」って言ひて。仏さんに心経さんを唱えているにもかかわらずね。そのあと御教祖さんの霊導の⁵⁾自覚反省懺悔文をあげるのでうるさいので「もうやめて」って言ひました。

⁶⁾初めて修法を受ける

それでお父さんがね、あるとき（昭和35年）「きょうは本部からとても偉い先生が来ていただけるから、いっぺん神さんっていうものは、どんな神さんがあるか見るだけでいいから、ただいっぺん見るだけでいいから」って誘ったん

ですよね。それで、お父さんが言うなら一度行ってみようか、ということでここへ御参りさせていただいたのが最初なんです。その当時、播磨先生⁷⁾が来られてね。眼鏡をかけられてじろっとね。それで体がぶるっと震ったぐらいぞっとしましたよ。そういうこわいような感じの先生でしたけどね。でもその方にお修法いただいたんですよ。こわかったですよね。そうしましたら二十年先の事までおっしゃられてね。最初にお修法いただきましたのがね。「黙ってそこに座ってなはれ！」って言われてましてね。「最初線香立てなはれ！」どないして線香立てたらいいのかまあ自分でいいわと思って立てて神殿の方にだけ立てたら、「こっち（神殿の右側にある西垣家の先祖を祀る仏壇）も立てなはれ！」って言われてましてね。それで線香立てて、それで黙って私自分の願いもかけずにね。「自分のお願いをかけなさい」と言われたけれども、なにをお願いしていいかわかりませんでした、が、「私の体が弱いものなら丈夫にしてくださいますように」とお願いかけていたんです。ただそれだけ。

そうしましたらね、「あんたさん、二十年苦勞しまっせ」言われましたわ。「その辛抱できまっしゃろ」って。「その二十年二つに分けて、前の十年間、三年間というものは見ざる、言わざる、聞かざるだ」って。「なんにも言わずに泣いて我慢をしなさい」って言われたんです。「そして五年たったら一つ苦勞が減るでしょう」って。「十年たった時には、ああ辛抱してよかったなと思うことが必ずあるはずだ」って。「そして十五年たったその時には、ああよかったなあ、私もこういう生活をさせていただくのかなと思うようになる」って。「そしてまた二十年たったその時には、ああよかった」って。「私これでもいいんだろうかなってそういう生活させていただけるからね、なんにも言わずにとにかく手を合わせていきなさい、辛抱していきなさい」って言われたんですよ。

教会長先生とのやりとり

そして主人と一緒にしましてね、三ヶ月ほどは「お酒は私は嫌いです」って一滴も飲まなかったんです。ところが四ヶ月目になりましたらね、「お父さん（当初同居していたかよの父の上岡音松）がお酒飲んだったら買って来てあげよう」ということで「それじゃー合ぐらい買って来てくれないか」という

ことでね、一合ぐらい買って来たんですよ。毎晩飲んで。そして半年たち一年たちしますと一升瓶下げてね、歌うたって帰って来るようになったんですよ、外から。一升徳利を下げてね。そうしまして一年程たちましてね。そして二年目に、土建業の下請仕事をさせていただいて、そしてお金が入るとね、ポッと町へ出るんですよ。遊ぶんですよ。三拍子ですわ、その遊びがね。ですけどその仕事師さんの支払のお金だけは全然手をつけずに帰って来て、自分でこれだけあると思えばその金だけ使ってね、帰って来るんですよ。知らん顔して。でもなんにも言えないんですよ。（お修法では）言うなということですから。しょうがないな。それでここの教会に来て一週間おきのお修法いただきました。母にも言えない、私七人きょうだいの長女ですが、妹にも愚痴はこぼせない。とにかく見ざる、言わざる、聞かざるって言われてますからね。で、教会長先生に「先生お修法ください」って。「またかな」って。「はい！ どうにもなりません！」って。そこで先生がお修法下さるんですよ。「なんにも言わずに我慢しろ我慢しろ」って。で先生にこう言って泣いたことがあります。「先生、我慢しろ我慢しろって限度がある。一度（夫に）腹いっぱい言わせてください」って私、先生に泣いたんですよ。「あかん！言うたらあかん！ 絶対言うたらあかん！ いままで積んだ苦勞が水の泡になる」と教会長先生、「ここで泣くだけ泣いてそして笑顔みせて帰れ」と言われたんですよ。そうしてちょうど三年たちましてね、そうしましたらね、ほんとに不思議とね、道楽の一つが止まりましたわ。そしてね、まあ五年たちましてね、一番最初の道楽というのはねもう三拍子ですから、打つ、飲む、買うですわね。その女の方がなくなりましたわね、その遊んで来るのが。遊ぶというのはお金出して遊ぶんですからね。それがポツリ切れました。二人目の次男を産みました時にね。五年たちましたら、今度は競輪が止まりました。不思議と。「もう競輪に行っても、おれは一銭もよう取らないから、損するばかりだからもう競輪はあほらしくて止めた」ってこう言いましたわ。それで競輪が止まりました。

修法による行

でも苦しみはなくなりませんでした。そんな時、次男を産みましてから一年間の日参行が始まったんですよ。九月の二十日にお産しまして、そしてちょう

ど十月の十日の日にここに御参りさせていただいたんです。その時にね、(教会長先生の修法で)「明日からと言わず今日から一年三百六十五日一年間の祈願行」が出たんです。どうしようと思いましたがね。長男は二才と八ヶ月しか離れてませんし、一人はミルクですしね、で、上がお昼寝しますね、そうすると(夜の)十二時くらいまで起きてますわ、おもちゃで遊んでね。それが寝るともう十二時から一時ごろになって、「あなたには御参りの時間ありませんよ、夜も昼もありませんよ」とお修法で教会長先生から聞かせていただきまして、そーっと自転車を持ち出して、夜の一時でも二時でも三時でも、この教会の玄関に額ずいて、ほんとに泣いて心経さん三巻ね、唱えて、帰って。そして下の子が昼寝をしている時は上の子おぶってね、ここの教会へ御参りさせていただいて、やっと一年間。台風の時私一人でした、カッパ着てね、主人に子供託して、そして朝早く御参りさせていただいてね、雨の日も風の日もいわずに、ほんとに弱かった体ですけれどね、一日も不思議と寝込むことがなかったです。病気一つしなかったです。守っていただけてました。

そしてああやれやれ一年たちましたと思って喜んでいたんです。そしてまたお修法いただいたんです。そうしましたら本月から親教会ですわ。西陣教会、京都のね。一年間の行がでたんです。また足運びの行ですわ。どうしようと思ひましてね、酔いますから。そしてねお薬⁸⁾いただいて。高見峠越すんですよ、奈良県側は。ここから四十分ぐらいかかるんですわ。そこから吐きだしましてね。そして京都に着くまで吐いて吐いてもう吐く物ないんですよ。ぐったぐた。それでも教会長先生窓開けて、勝先生と乗ってもらってね。そして当時森タクシーさんで行きましてね。先生らもう震えてみえますわね。私はもう苦しいばかりで。その後ろを先生が京都まで、ほんとにお加持⁹⁾していただいて、撫でていただいてね。それで京都へ着いてやれやれと思ってもうぐったぐたなんですよ。それこそもう寝る気力もなくなっただけくらいで。そしてすぐに教会長先生、谷口先生のお仏壇、神殿借りましてね、教会長先生に一生懸命お加持していただくんです。そうすると体が楽にさせていただきましてね。そこで半時間か一時間ぐらい休ませていただいて、そして日下西陣教会長先生のお宅へね、一緒に御参りさせていただくんです。そして帰りはまたほんとに

地獄だったです。飲まず、食わず、吐くものもなく、ただもうからえずきばかりで、それが寒い十一月ですよ。十二月、一月の雪の降る中をね、教会長先生ご夫妻がね、そして森タクシーの運転手さんもほんとに防寒着を着て、マスクをかけて、膝へ毛布掛けて、あったかいっこして行ったからね、気兼ねせずにいくらでも吐けたんですよ。窓を全部開け広げてね、そして京都までその同じ行をなんにも言わずにね、三人の方が行して下さいました。それを十一、十二、一月二月と四ヶ月間、一番寒い時、雪が降って来ますよね、雨が降っても窓を少し開けてね、濡れない程度に。ほんとに忘れることができませんけどね。

また五ヶ月目になりましてね、ほんとに不思議なくらいね、体が楽だったんですよ。で後ろから「今日は大丈夫？ 今日は大丈夫？」って先生方気遣ってくださるんですよ。「なんともありませんなんともありません。」とうとう谷口先生のお宅までね、吐かずに酔わずに連れてっていただけたんです。そしてたら谷口先生ね、やはり（御教祖様の）御霊導をいただいておりますね。「今日あたりは、ここまで酔わずに来てお粥さんぐらい食べられるだろうと思って、お粥さん炊いて待っておりました。」ってね、お茶漬の上に梅干しとかね、お粥さん炊いて御飯と両方でね待っててくださったんです。その時ほんとに美味しくいただきました、五ヶ月ぶり。それから全然酔わなくしていただきましたね。丸一年間、あの二人の子供をミルクとともにお母さんに預けてね、そして連れてっていただきましたけどね、こんなに行をしないと私、ほんとに幸せになれないんだなと思って、ただ体の弱さと主人と主人の道楽、生活がありますからね、なんにも考えることなく、ただ信じ切ること、行じ切ること、ただそれ一念でした。なんにもなかったですね。他の考えていうのはね。それからもう一ヶ月、十三回御参りさせていただきまして、一年間、一ヶ月間お礼参りさせていただいてそれからというものは本部へやっていただいてもどこへやっていただいても全然酔うことがなくてね、体もだんだん丈夫にしていけますし。

修法どおりの生活

そのうち主人もだんだんこう、道楽が一つひとつ止んでね、一日早く帰り、

一週間早く帰り、また家へ帰る日が多くなりましてね、もう一番苦労だった時は一週間ぐらいしか家にいてくれませんでしたね。一ヶ月のうち。二十日はもうほとんど外泊でしたからね。お金が自由になりますから。で三年で土建をやめまして造園業に移りましてね、それからおかげさんでだんだんと主人がまじめになってくれましたしね。「かあちゃん、(自宅の)改築工事しようか」って言ったとき、私不安でしたけどね、お修法いただきましたら、「まかせなさい」って出まして。それでもう車を買うにしても、家の修理工事をするにもなんでもお修法いただいて、「だめだ」と言えば車は買いませんしね、「お父さん、車買うって言ったけども、時期が悪いからもうしばらく待ちなさいと言われるから、もう一度お修法いただいてからね」と言って。そのうち主人もここへ来てお修法をいただくようになりました。そして「今は時期がいいから買いなさい」って言われると、いい車にあたってね、その車、一度も修理をしなくて、今度の買い換えまで修理をしなくてもすむ。ただタイヤ換えるだけと、点検だけですませてもらうのです。二年たって車を買換える時になると、またお修法いただきにくるんですよ。そして「だめだ」といわれると買わないんですよ。「時期がよい」というと、買ってまたいい車があたるんですよ。いままでずっと二十何年間きてます。お修法どおりに。

お加持とお灰さん¹⁰⁾

子供たちも小さいころから、風邪をひいたりしたらその診療所に行ったあと背負って教会へ参りましたからね、もう必ずここへ来ないと家へ帰れないと思っていたんでしょうね。ぱっと玄関へ入ってずっとそこへ座るんですよ。神殿にね。そうすると教会長先生はどうしてもお加持をしないわけにはいかないんですよ。「おばちゃんこんにちは」って子供がととととと来てぱっと座るんですよ。で先生にお加持いただいて。一人が終わるともう一人が前に行って座るんですよ。で二人ともお加持していただいて。で、私もお加持していただいて。親子三人でお加持していただいてね。いつもそれでした。それは小学校六年になっても中学になっても同じでした。その診療所に来ますとやはりお加持いただいて、そして帰って行きましたね。そうすると不思議にね楽にね。一回も学校休まずに、そうたくさん熱も出さずに。麻疹にかかっても何に

かかって、ほんとに軽くすませていただきましたね。そしてここのお灰さんというものをね、いただきましたけれども、うちのは不思議と怪我をして医者へかかると膿んでくるんです。お灰さんをいただいてそこに貼るんですよ。三回ぐらい付替えますとね、へたになってくるんです。その、皮ができてくるんですよ。そしてお風呂に入っても膿まないんですよ。

長男の入試の際のうかび¹¹⁾

そして上の子供がお修法いただいて鈴鹿国立工業高等専門学校に(昭和52年に)入りましたけれども、はじめは、私立の熊野工業高等専門学校、松阪工業高校と三校志望していたんです。で、私教会長先生に連れていただいて、京都(の西陣教会)に参りまして、どこがよしいかと聞いたら、「ここ(鈴鹿高専)にきなさい」って、ここは国立ですよ。そうしましたら学校の先生も「国立一本に絞んなはれ」って。私は私立にやろうと思ったんですけど。そうしますとね、不思議とその国立へ入らせていただいたんですよ。お修法どおりに。その子もお修法いただきまして「男は度胸だ」って。で子供も度胸が据わったのか、「まあとにかく度胸だめしに行って来い」ということでね、受けることにしました。そしてその試験の前夜はゆっくりさせましてね。(試験には私もついて行ったのですがその時に)「試験の時にね、手を合わせて、御教祖様をお願いしなさいよ。そうして教室に入るんだ。校門をくぐる時にはね、これは学校じゃないんだ、学校の学という字を書いて行ってこれを口に飲みなさい。そうすると気持が大きくなるから」と言ってやりました。そうしたら「西中で勉強したと同じ気持になった」って。とても難しい算数が一番最初だったんですって。問題を見た時に「何にも僕はできない」と思ったらいいんです。そしておなかにね、手をあてて「僕にはわかりませんがどうぞ思い出させてください」って、お唱えしたそうです。そうするとぱっとうかばせていただいてささっと書いていたんですって。手の動くまんま。自分の感じるまんま。最後までずうっと書いていきました、全部。それができたって。そして理科は得意だったものですからたやすくやって、国語のわからない漢字があったそうなんです。その時もわからない時にはおなかに手をあて目をつぶって、「どうぞ思い出させてください、私にはわかりません」とお願いすると、ふっと思ひ出させてい

ただいたのがそれだったということです。（読みのわからない難しい漢字があって）「僕の記憶を忘れないように教えてください」とお願いしたそうです。家へ帰ってきてね、「こういう字をなんて読むんですか」って書くんです。私もお父さんもわからないんですよ。字引を引いたらとっても難しい字でしてね、そんな難しい字を百問のなかで二問だけ覚えて帰りました。「ほんとに円応さんて不思議だね」ってきました。

そして作文が一番最後にあると聞きました。私お勤めしていて、ちょうど「祈願をかけなさい」ということで、子供の祈願をちょうど二十一日もかけていたんです。三十巻の心経さんを朝晩唱えていましてね。それを済ませて明日は試験だなんて時に、「ワタシトシンブン」なんだしらんと思って、そのおこたのうでね、掃除していた時にね、（こたつの上にちらかっている新聞を見て）「ワタシトシンブン」ってなにかしらん変だなと思ったらね、子供の作文がね「新聞と私」という題名だったんですって。それがさかさまで「私と新聞」と。「それがもしかすると作文に出れば」と言ったら「そんな馬鹿な」と言ってましたね。「かあちゃん、さかさまだったけど新聞と私という題だったよ」と。びっくりしました。その時私。なんとなしに頭にぱっとうかばせていただいてね。「ワタシトシンブン、ワタシトシンブン、ワタシトシンブン……」頭に焼きつくんですね。ほんとに不思議だなあと思いました。

そしてね四十人とるところを倍の八十人っているんですよ。で口頭試問で落として、面接で落としていくわけですね。だから面接の時にものすごくたくさんいるんですって。「僕はだめだな」と思ったけれどね、「行儀作法だけは忘れてはなりませんよ、そのノックして失礼いたしますって。座る時にも行儀作法を忘れないように。言葉をはきはきと丁寧にお答えしなさいよ」ということを家で言い含めて聞かせまして、そうしましたらね、面接の時にね、「もう僕はいかんと思ってたけれども、問われるまんま先生にお答えした」って。先生に最後に「あなたの希望しない学科をこちらから言ってもあなたはこの学校に入りますか」って言われたそうです。で、「僕は家へ帰ってお父さんと相談をして決めます」という答えをしたそうです。希望しない学科には入りませんということを言わずにね。そういう不思議がありましたね。

次男のこと

そして次男坊がとってもわんぱくで、にいちゃんにきつくしめられているから要領を覚えるんでしょうね。こういうことをすれば叱られる、ああいうことをすれば叱られるっていうから、親の前では全然怒ることがないんですね。学校ではごそごそ悪いことをするらしいんですけどね。高校受験の時にね、お修法いただいたんですよ。「先生の言うように、先生の言う学校に行きなさい」と言われたんです、この子は。次男は学校を三校選びました。次男はね先生の言われる学校にやりなさいよと言われたんです。「そうでないとこの子は卒業できませんよ」って言われたんです。で子供が選んだのが飯南高、そして私立の熊野工業高等専門学校、それで相可高校と松阪工業高校と四校選んだんです。ところが担任の先生と校長先生に「相可高校の土木工業科に行きなさい」と言われたんです。でどうしても飯南高に行くって泣いたんですよ子供が。担任の先生も泣かれました。「なんで飯南高にそんなに魅力あるのかね。あんたが行ったって気が弱いから、絶対卒業できない」って。「はいって言ってどこへでもついて行く」って。で、（飯南高校に入学してから）一年生の二学期にね、タバコ、喧嘩、單車、それで停学でね、三週間のね。単位も取れませんわね。それで三学期に学校から呼び出されましてね、「この子は卒業できませんから、留年か退学かどっちかしてくれ」ということで、そうしたらね、自分で決めてきましてね。「僕は日生学園¹²⁾に行きます」って校長先生に言ったんですよ。私、日生学園ってあるの知らなかったんです。飯南高（の先生方）も知らなかったんです。そして探していただきまして。そしたら日生学園高校は第一高校と第二高校とありますということで、県の教育委員会に聞いていただいて、で「第一に行きます」って。で教頭先生は、鈴鹿高校を紹介して下さったのです。でもその子は最後まで逆らいましてね、で日生学園へ行きまして。もう日生学園高校へ行きますと、親と一日体験入学があるんですが、朝四時半起床ですわね。でテレビでやっていますね、声をかけてトイレを掃除したりするすごいがあるんです。そして一月の十七日のほんとに雪の降った寒い日にね、もうとっても行けないかと思いましてね、朝六時に電話をいれまして「とても凍結が厳しくて酷いからそちらにとても十時に着くことはできないと思いますから、

御了承ください」ってお願いしました。向うへ着きましたのが十一時半ぐらいでしたかしら、そうしましたらね、校門でね、一人立っていて「あ、みえた、みえた」という声がするんですよね。もうつるつるで歩けないんですよ。そうしましたらですね、生徒が十人校門のそとで脱帽で待っていて先生が二人「お早うございます、ごくろう様でございます」って。ほんとに涙が出ました。寒いなかをね、十時からずっと立っててくださったそうです。一年生の子供二人とね、あと二年生、三年生の上級生が、先生も、同じ寒さに耐えて。真青になってましてね、ほんとに涙が出ました。そしてもう荷物を全然持たせないですよ。布団も全部持っていきましたけれど、私のバックも持たせないですよ。先生もついて寮まで運んでいただいて。で子供がね、「僕はここへ来たからには覚悟をして来ている。ここさえ卒業すれば、自分にも自信がつくし、誰にも引き摺られることはない。自分は強くなれるから、心身ともに強く鍛えて帰るから心配せずに、お母さん、半年ぐらいは来てはだめだよ」って言ったんです。でも一ヶ月に一度だけ研修会というのがありましてね、親子の対面ですよ。一ヶ月たって行ったんです。その時にすごく怒りましてね、いくつか寮があるんですが、一番厳しい全力寮という寮なんですよ。六百人ぐらいの。それが一ヶ月たって行ったら副寮長になっておりました。そのかわり陰から毎日私ここ（教会）へ日参致しました。子供の大願を願って、（修法で）「お参りしなさい」ということで。そうしますとね、不思議なことにね、一年生から三年生まで、（子供がいろんな役をしていたことは）何にも言わなかったんですけどね、先生にもかわいがっていただいて、校長先生がね、「こんなすなおな、こんないい子供さんはなんで飯南高に入れなかったのかね、不思議でしかたがない。」それで本人が十時消燈でも別の部屋へ行って勉強して、それで五十人中の二番だったんですって。最初の試験が。「今度努力して一番になりなさいよ」言われて、努力して十二時一時まで勉強して、それで二学期は五十人中の一番になって、それで十組に上げていただいて、十組はもう一位の子ばかりです、その五百人おるなかでね。そのなかでまあ、四十人位いるんですよ、その中でもいいところにね、勉強して努力してね。で、帰って来ました時にね、一ヶ月たって帰って来たんです。その時にね、私びっくりしたのは

ね、「ただいま」って入ったんですよ。「おかえんなさい」って。そしてつかつかって入りましてね、それで脱帽して、「お父さん、只今帰りました、ありがとうございます。お母さん、只今帰りました、ありがとうございます。僕のために心配かけて、お金をたくさん使わせて、すいません！」って涙出してね、泣きました。その姿を見て、なんにも言えなかったですね。親子で泣きました。「よく辛抱してきたね」って、それしか言えませんでした。それからというものもう一ヶ月に一度行きましたけどね、ただもう面会の時間はもう学校でね決めておりますので。その時にやはり「お母さん、体が弱いのに、来なくてよかったのに、今度からおにいちゃんが来たらいいいよ。おにいちゃんがいてくれればいいよ」って。で当時鈴鹿高専ですからね、あの子は。で、車の免許を持っていたし、（次男は）「じゃあお母さんは仕事に行ってらっしゃい。おにいちゃんが来た方ができないところも教えてもらえるし、おにいちゃんここわからないから教えてくれ。この方程式はどうするの。」とか言ってね、次男が聞きますでしょ。そうすると「ここはこうしたほうがいいよ、下と上があるから、これはこうしてもこういう答えはいっしょだから、おまえのいい方でやればいい」と教えて帰るんですよ。そうして毎月一回二年間行ってくれました。

ほんとに今は大阪へ行ってますけど、学校ですけどね大阪の。でもアルバイトをして、でも親に……。親が今度は体の心配をしているんです。それほどがんばっているんですよ。最初行ったところが、下宿を気に入らなくて、そこは創価学会の方の下宿ばかりでね、その学会の青年部に入らんかと言われて、勧められて勧められて、一年は辛抱したんですけど二年目になったら「僕は学会に入るのいやだから」って、自分でアルバイトして四十万の金ためて、そのお金でマンションに移りましてね。「僕は日生に行って良かった」って言います、子供は。「日生に行っていなかったら、うだうだな人間になった。だけど日生に行ったおかげで僕は、忍耐というものと、我慢というものを教えてもらった。」そしてこの御教祖様のね、「お母さん、円応さんはどうしてどこへお祀りしたらいいの」って。「お母さんが最初にお祀りしたお初の水をあなたの冷蔵庫の横にお供えしたでしょ。そこにお供えして朝いただいて、交通地獄だ

から一日守っていただきなさいよ。夜は今日ありがとうございましたってお礼申し上げて、その水であんたの心を清めて力をいただきなさいよ。」電話で聞いてきましてね。今でも帰って来ますと、不思議と仏壇に先に手を合わせて、行くときも仏壇にお参りして、円応さんにお参りして帰っていきます。だから、心配はないですね。

あの十年間の苦しみ

でもその十年間という苦しみというものはほんとに辛かったですね。親にも言えない、兄弟にも言えない、ましてや主人には全然言えませんしね、他人さんにも言えませんしね、教会長先生だけでしたね。でもその私の苦しみを教会長先生、何にも言わずに聴いてくださったです……。ほんとにこれで私、人は達磨さん七転び八起きって言いますよね。その三倍だから私は二十四回起きて転んで、起きて転んでたなと思って。その生活でしたけど、ほんとにすやすや眠る二人の子供の顔をながめてね、今晚（こそ）は（子供と死のう）、今晚（こそ）は（子供と死のう）、と思ってどれほど夜を明かしたことがあるかわかりません。でも何にも言わずにしておりますと、四日目頃か五日目に主人が帰って来ますでしょ。そして何時帰って来てもいいように私は食事を作って、食べなくても食事を作って、待ってるんです、座って。だからもう徹夜することもほとんどですよね。それでも気が張ってますから、御教祖さんにお守りしていただくのと、倒れないんですよ、自分では。そうしますとガラッとあけて「ただいま」って、「かあちゃんごめんなさい、すいません」って主人のほうが頭を下げてあやまりますから、なんにも言えないんです。私は言いたくても言えないんですよ。それで「御飯にしますか、お風呂にしますか」ったら、「御飯にしてくれ」って、「食べてないから」って、夜中でも、二時か三時でも御飯を食べて、一緒にお付き合いしてそして風呂へ入って休みます。そんな生活を五年ほど続けました。それからそういうことのひにちがね、段々と少なくなりましたね。でもその五年っていう苦しみというものは、ほんとに地獄の苦しみとはあのことでしょうね。のたうちまわってよく言いますよね。あのことだろうと思いますよね。今から考えてね、よくあの苦しみあの生活に耐えたな、と思います。

こどもの援助

で子供たちでもね、やはりもの心ついてから覚えてますからね、「おかあちゃん、辛かったろうね」って今になって言いますね。ですからあのお父さんが何かある時にはね、子供が楯になって庇ってくれますね。私にはなにも口答えはしませんけれど。

私はよく忘れものをするんです。お父さん(夫)は記憶力がいい方ですし、私はカラスですから。よく忘れるんですよ。そうすると子供がね、「かあちゃん、さっき父さんこういうこと言っていた。」「ああ、忘れてた」って。

京都や本部へ御参りに行きます時もね、何にも言わなくても、子供が私のするだけのことはできなくても、お供えものだけはいつももう、何か買って来ると小さい頃からお供えする習慣がありますから。どんぶりですわ、なみなみと水が、帰ってきたらお供えしてありましてね。それでほんとにお供えものもたくさんしてありましてね、御飯はできないからってことで。それできれいに後片付けもしてくれてありますね。神棚さまから、なにからすっかりときれいにしてくれてありましてね。それで主人と二人で食事に出掛けたり、お互いに助け合って庇い合って主人と二人で、今やってくれてますのでね。

その子の鈴鹿高専の就職の時にもね、「お父さんとお母さんを捨てて、どこにでも出て行きなさい、あんた若いんだから羽ばたきなさい」って言ったんです。「でもお母さんが心配だから二十年三十年も勤めて田舎に帰って苦勞するより、僕はたとえ一人でも二人でもどんなところでもいいんだ。お母さんをみて、お母さんの傍で働けるところならそれでいい。出世をしたいとも、何をしたいとも考えていない、そして家から通う」ってね、言ってくれています。ですからほんとに助かります。子供はほんとに素直にね、二人とも素直に育ってくれました。親の苦勞を見て育ってますし、ありがたいと思ってますね。下の方はまだまだ、親の苦勞を見ててもやはりまだ甘えがありますけど、男の子ですからね、でもそんなに無理なことも言いませんけどね。主人の方が甘いです。ね。「ああしてやろう、こうしてやろう」って、下の子に甘いんです。上がね「僕にはとても厳しかったけど、下はなぜ甘やかす」って怒りますけどね。長男ですからほんとに厳しく育てましたから。苦しいなかからでも長男だけは、跡取

る子だからっていうんで厳しく育てました。次男は外へ出す子だからってやっぱり甘やかすんですね、そこで。別け隔てすることないけどやはり、兄が叱られてれば「僕もこうしちゃいかんか」という気持ちがわくだろうと思うとそうじゃなかったですね。やはりそこで要領を覚えたんですね。親の考えは甘いんですよ、それだけ。ですけれどもやはり、先月でしたか「僕はお修法を何ヶ月もいただいてないから、今月はいつ先生来ていただくんですか。お修法いただきたい」って。でお修法いただいて、聞かせていただいて、してはいけないこと、自覚してしなきゃならないこと、迷っていることがふっさきて今はずっとしている。迷ってたんです。子供は子供なりに迷いが出てきますとね。そうしましたらそれがふっさきまして、先生は「こうですよ」って聞かせていただいてね、やはり子供も同じようにこの道で、すがらせていただいておりますのでね。

家庭と活動のあいだ

今は主人の方が理解がなくなったぐらいです。そりゃ私がいなければねえ、洗濯、お風呂の準備もしなければならぬですし、私がいれば全部しますけれども。いなきゃ外食しなきゃならない、店屋物として食べなきゃならない。今主人の方は「行くな、行くな」ですわね。「またほかして行くのか、またほかして行くのか」ですわね。でも子供は「お母さん、行って来なさい。お父さんは僕がするからいい」って。子供がね、陰から押してくれる。最初は何にも言わずに黙ってましたけどね、今は主人が反対に出るようになりましたね、やはりしょっちゅう留守空けられてると、「寂しい」って言いますね。「居るものが居ないと寂しい」って。「二日も留守空けられてほかされて、自分で働いて疲れて帰って来て、自分で一人食べて、夜が寂しい」って。「これも可愛そうだ」って言いますよ。でも子供は言ってきません。もう十日ぐらい前からね、「本部へ御参りさせていただきたいんですけど、いいですか。お父さん、そのころの仕事の段取りはどうなっているんですか」って聞くんです。「じゃあおまえの思うようにしろ」って許可出してくれますね。行ってはならない時は、今日はこれこれだから、今日は頼むから家にいてくれないか。仕事のことで皆が今日集まるから、ということで。行かなきゃならない時でも、どこへも行け

なくなる時もありますしね。辛い時もあります。行かなきゃならない時でも、行けない時は、ああ申し訳ないんだって、心で泣いてます。それだけ自分の尽くしが足りないからそうだなと思ってね、泣いてますけれども。でもこれが自分の宿命だなんて思って、これもまだ業が深いからだなんて、自分で自覚しております。主人に仕えて、仕事師さんをたてて、私はこの行をしていかなきゃならないんだなんて、そう思います。「今夜はもうお父さん先に休んで、これ整理して置くからいいよ。いいからこれ、私、帰って来てからやるからいいから」ってね。

現在の境遇

今はほんとにですから、最初は自分の家もなく、三年目に小さな家を買って（両親と別居して）、十年目にはその家を改築して、十五年にまた十五坪増築してそして二十年目には、三十坪ちょっとありました家を売却してそしてまた二百坪の土地を買って、四十五坪の家を建ててね。ですからほんとに、今年で三年目なんですよね、ええ丸四年目に入りますけどね、ほんとに二十年前にいただいたお修法、辛い時も苦しい時もそのまんまですね。もう最初は住む家もなかったですしね。親と同居でした。で三年目に小さな家を買って、そして十年目には増築して、改築して十五年目には十五坪程また増築してね、キッチンと六畳一間と廊下と風呂とね、洗濯場と物干し場とね、そして二十年目にはその売却しましてね、で二百坪の土地買って、そしてここで三度お修法いただいたんです。で二回、お修法で時期が悪いから止めなさいと言われてまして、三度目に設計図ができあがってきました時に、時期がいいからと教会長先生にいただきましてね、神殿にお供えてね、そして時期がいいからやりなさいってそれでかかったんです。そうしますと一番物の安い時に、一番いい物を使っていたらいい。ほんとに今はなんの苦勞もないですね。もったいない、ほんとにこんな生活させていただいていいのかな、ただもう自分の家を持ってなんにもせず、ただ炊事洗濯だけ。ただ庭木に水をやって、草を取ってそれが私の仕事、その仕事も朝主人が仕事に行かない日はね、全部盆栽全部植え換えを毎年二十から三十、植木の鉢の植え換えをするんですよね。それも主人が全部してくれます。剪定も全部、職人さんが入ってくれますし、主人がしてくれます

し、私ですから植え換えも株分けも何にもするものがないんです。全部主人がしてくれます。「俺はこれするから洗濯しろ、これしとくから買物に行ってくる」って。で、主人はこまめな人でね、お勝手に入るのが好きでね、こまめになんでも作るんですよ。ですから私がどこかへ行行ってね、遅くなるとわたしの分もちゃんと作ってくれてあります、体が弱いですからね。松阪の中央病院に二週間に一回行くんですけどね、今日も行ってきたんですけどね、今日は帰ったの六時ちょっと過ぎてました。そして御飯の支度して食べて来たんですけど、それでも手伝ってくれますね。「じゃあおまえはそれしておけ、俺は何か買いに行ってくるから」って主人が言ってくれます。でやはり「病院へ行行って、疲れて帰ってくるから、えらいだろ」って助けてくれます。子供も庇ってくれますしね、我儘言っただけでほんとうに申し訳ない、罰が当たります。

でもこの円応教の御教祖様の御縁をいただいてなかったら、今の自分はおそらくいなかったらと思う。おそらく生存してなかったらと思う。耐え切れなかったらと思う、辛さにね。三拍子のあの辛さ、そして自分でお父さん（夫）になんとも言っていたと思います。愚痴をこぼしていたと思います。早く帰って来てくれとか、飲まずに帰って来てくれとか、道楽をしないでくれとか言って、なんか言っていたと思います。親にもまた愚痴をこぼしていたと思います。だけど親は分かっているかも知って知らないふりをしていますし、なんにも言いませんしね、ただ私には、ここが私の家なわけですから、教会が。胸の晴らしどころだったですね。腹いっぱい泣いて、そして先生、「ここで泣いて、家では笑っておらにゃいかんで！」いつも先生は、「笑顔見せて、お父さんにサービスせなあかんで、笑顔みせないかんで！」先生はいつもそうおっしゃいました。もうそれだけでしたね。

でもなんにも言わずに耐えてこられたっていうのも、心の支えがありましたからね。信じて、行じていくこと、因縁を切らせていただく。自分のこの辛い思いを二度と子供に味わせたくないっていうことですよ。私の因縁、主人の因縁、二人持ち合わせた因縁同士、悪因ですわね。その因縁を継がせたくないというその一念だけでした。ですからね、もうなんにもいわずに教会に行ってくるって言うよね、「おい、行ってくるよ、気を付けて早く帰れよ」って。「先

に寝ててね」って言ってね、来るんです。本部から帰ったり、親教会から帰るとね、必ず起きて待っててくれます。「ああ、今帰ったのおかえり」って。「お父さんありがとうございます。只今帰りました」って。主人があって子供がいてくれて、だからこそ自分が御参りさせていただけるんですからね。まず自分がお礼を言いますね。

布教師になる¹³⁾

私が布教師（覚導師）になったのは五十七年です。七月の布教師養成講習で。どうしてもって、お修法でね、いただきまして。いやだ、いやだと言ってるうちはしょっちゅう寝込んでました。身上で知らされるんですよね、強情張って、強情張ってね。何度も引っ掛かってね、寝込んで。それで今度、親教会から日下教会長先生がね、五十六年の十二月に来てくださった時にね、「今度寝込んだら命ありませんで、今から帰って主人と相談してきなはれ！」って怒られましてね。でお父さんに「お父さん、どうしても行かなきゃだめだと叱られてきたけれど、一月か七月かどっちかにしなはれって言われてきたけど、どうします？」って言いましたらね、「体が弱いから、一月は心配だ。七月だったらいい」って言われて、七月に出していただきました。で十五日間。その時はちょうど、六月にお修法いただきまして「心試しがある」と言われたんですよね。そして「祈願をかけよ」って言われたんです。そして日参行が出ましてね。そうしますと布教師養成講習の一週間前です。主人が、信仰をとるか、俺と別れるかどっちか一つにしるということだったですね。で「お父さんにおまかせします。今から教会へ行きます」って言うよね、「どこへでも勝手に行ってこい」って言うんですわ。「自分の思うようにしろ、勝手にしろ」って。で私教会へ足を運びますよね、そしてちょうど二十日の晩でしたか、「今夜は今から教会へやってもらいます」って言いましたらね、「明日の朝は出るのが早いから、そのつもりで準備をしておけよ」って言うんですよね。それまで電車で行くって言ってたんです、一人で。「朝早きゃどうするの？」って言ったら。「おまえ送って行くんやがな、あたりまえのことやがな、おまえの心試しをしただけだ」って言われました。「おまえがどっちをとるか俺が心試しをしてやった」って言われました。そして（兵庫県氷上郡山南町の）本部まで送って行ってく

れましてね、一緒に御参りさせていただきました。それまで主人は（黙って下見に）二回行ってらんですよ、本部へ。そのことを本部に着いて初めて言いました。

一番辛かったこと

私は三十八年の十月五日に入教いたしました。教会長先生が「また」ってね、一週間に一度ぐらいお修法いただくんですもの。（夫の問題で）胸いっぱいでもうなんにも、どうしようもありません。頭いっぱい、胸いっぱい、誰に愚痴をこぼすこともできませんしね。そして先生なんにも言わなくて、お修法してくださいました。それだけでした。そのあと、おはなしして胸をすっきりして、そうするとここで泣いてもいいから、向うでは嫌な顔を一つもせずにいることができるのです。ここだけですから分かりませんしね、どなたにも伝わりませんからね。「人の愚痴を聴いたり、人の話を聴いたり、お互いにそれを聴くのが私の役目であるし、私の因縁でもあるから」って、教会長先生はなんにも言わずにね、私が泣いてこぼす愚痴を一心に聴いてくれました。ですから私随分我儘でした。こどもとしてはほんとに我儘でした。

やはり一番辛かったのは、一年間の行ですね。一年間雨の日も風の日もね、日参行ですからね、ここの門前に額づいてほんとにもう。そうっと自転車を出して、自転車に乗ってね、夜中です。「あなたには夜も昼もありませんよ」というお修法でした。一番辛いのは冬でしたね、雪の積もったところをさくさくさくさく長靴を履いて歩いてね、でもその行をしないことにはね、因縁を切っていただくことはできないんです。やはり教えていただいたことは、実行させていただかないと何にもなりませんからね。それが行ですから。（私が日参行をしていることを知っていた人も）あります。でもその当時はね、よく笑われましたね、「あれ程までせんらんかね」という言葉が随分耳に入りました。言われました。

父の脳卒中

色々不思議なことを見せていただきました。父のこともそうですね。若くて六十五歳でなくなりましたが、五十七歳の時（昭和40年）ですか、脳卒中で倒れましてね。三日間意識不明っていうんですかね。そしてなんにもわからな

くて、三月の二十八日頃でしたか、耕運機で苗代をしている時にね。三日間意識不明でしたね。その時もお修法いただきましたね。「今日から一週間、お水垢離をとりなさい」というお修法いただいたんですよね。私はまた水垢離ってお水をかぶるのかとばかり思ってたんです。「そうじゃない、水垢離っていうのは朝早く教会にお参りして、初水をお供えさせていただいて、そして一週間の行をしてその水をいただいて、お父さんに飲ませてあげなさい」とおっしゃってくださいまして、三日間教会長先生が同じように、お願いしましてね、先生に夜に家を出ますからお願いして（教会を）開けておいていただいて、先生は三日間私と一緒に勤めてくださったんですけどね。

そうしましたらね、不思議なことにね、私最初の日ですよ、母と妹にだけ言ってあったんですよね。「お母さん、こういう行が出ているから、教会へ行くからね。朝早いから」と。その時私は「子供に後髪を引かれることのないようにしなさい」というお修法だったんです。その子は（朝の）九時まで必ず寝るんですよ、ミルクを九時半に飲んで。ですけど（夜の）三時頃から寝なかったです、ぐずぐず言ってね。「あっどうしよう、どうしよう」と思って、四時になって（教会へ）行きますしね、それで妹を起こしまして、「姉さんが出て行って、この子は泣くかもしれないから、泣かせたらお父さんが起きるから、悪いけどこの子を見とってね」と、妹にお願いして、ここ（教会）へ来ましたらね、（あとで妹が）「姉さんがカタンといって自転車を出す音がすると泣くのと一緒に、姉さんがカタンと自転車を止めるのと一緒に寝息をたててきた」と言うんです。これは私が行に行けないように、子供が足留めをするんです。（このようにして、子供に後髪を引かれることのないように心試しをされるんです。）

いつもお父さんはガーガーガーという脳卒中独特のいびきをしてました。そーっと開けたんですよ。なんにも知らんはずのお父さんがね、「円応さんお水貰って来てくれたかね」と言っただけです。お母さんと顔を見合わせてびっくりしましたね。「お父さんどうしたの？」と言うと、「ゆうべからそんな気がして、おまえさんに寝てたと思ったろうが、お父さん全然寝てないよ。待ってた」と。「飲ましてくれないか」と。一週間の内にね、すっかり記憶

を取り戻しましてね、自分の子供の名前も、自分の妻の名前も全然分からなかったんですけどね、すっかり、過去も現在も記憶を取り戻しました。それから私ね、「ああ、ありがたいな」ってね、お父さんは食事、お父さんなんにも知らずに一ヶ月食べてたんです。食べさすもの、飲ますもの気管に入るといけな
いと思って、私達も呼吸を覚えて、その間、その間に口へ入れて。それが記憶を取り戻すと同時にね、しゃっくりが止まりましたね。それで起きて座って、食事をするようになってね。「お父さん、とってもいちごが好きでいちごをたくさん食べたね」って言ったらね、「そんなに食べた覚えはない」って言いました。美味しい美味しいって言って食べてたんですけどね、事実知らずに食べて、美味しい美味しいって言ってたんですよ。でも一週間行をさせていた
いたおかげで記憶を取り戻させていただきましたからね、どんな食事を食べていたかやとわかったんですよ。

父の死

それで七年たちましてね、こんどは（松阪の済生会病院に）入院しましてね。「腹が痛い、腹が痛い」って言いましてね。熱は下がりませんし、もうお茶も喉が通らなくなったんです、一週間程で。酷い便秘でもありました。お医者さんは直腸癌かもしれないっていうんですよ。それで直ぐ、一緒について行きましたらね、直腸癌でなくて、それで灌腸していただいてすっきりさせていただきました。その時お修法いただきましたらね、「三度無理な願いはせんでくれ、だけど三七、二十一日間、お父さまのために祈願をかけなさい」って言われたんです。で私は（実家の農業があつて）病院の看病についてやることもできないから、妹と母と二人で（看病に）行ってきましたからね、ですけど二十一日間というもの、なんにも食べられなかったお父さんが三日、ここ（教会）へ運ばせていただいてから、少しずつ食べられるようになりましてね。一週間、十日たったら病院食だけでは足りなくなって、全部食べてね、そしてまだあれが食べたい、これが食べたいって。それで母と兄弟にはね「お父さん、今度はとて
も二十一日たって、今度はお父さんは生きては帰って来れないよ、お父さん家の畳の上では成仏できないよ」って言っていたんです。「あんた達もそのつもりでこれが最後の孝行だと思って精一杯思い残すことがない孝行しといて

やってくれ」って、全部兄弟に言ってたんです。で主人、「おまえあんなこと
言ってるけど、行けば行くほどおやじは元気になって歩いとる」って言うんで
すよね。「そうじゃない、二十一日間たってごらん、お父さんはなんにも食べ
れなくなるよ、どうなるか分からないよ」って言ってたんです。そうしますと
お母さんにね、「お母さん、明日はね二十一日間の満願です。今夜はどうです
か」って（電話で）聞いたら、食事が半分に減ったと言うんですね、一度に、
朝から熱が出て来て。二十一日目にはね、「今日は朝からなんにも食べられな
い、熱が出て。そして外科へ移される。手術ということになった」って。とこ
ろが手術してものの半時間たたないうちにレントゲンをあててみたら、開いた
ところがね、なんにも分からないんですって、異常がないそうですね。それで
食べられないしね、お茶も喉を通らない。先生は肺をはぐりましたらね、胆嚢
が破れて、胆石でね、危険だったんですって。ところが肺の裏に胆嚢がありま
して、胆嚢が破れて、全部内臓が腐ってまして、腹じゅう膿みだらけ。それで
もその食事を食べさせていたんです。その二十一日間は食べたい物をそっくり。
それで手術をしました時にはね、胆水も腹水もドロドロと。日がたてばたつほ
ど、濃くなっていくんです。ちょうど手術をして二十日目でした、亡くなりました。

それでも食べたい物は二十一日間のうちに兄弟達も、みんな食べさせてあげ
たりしました。手術してからはなんにも食べることはできなかったですね。最後
に言った言葉がね、手術しました時にね、「もう俺は円応さんには助けては貰
えんぞ。円応さんに無理な願いをかけても俺の命は助けてもらえんから、お父
さんは（手を合わせて）これだよ」って。で鏡を見せてくれって言いますので、
しょうがないから見せますとね、「うん、お父さん、これなら家へ帰っても恥
ずかしくない、いいほとけの顔してる。お礼参りをしてくれ。願いをかけてく
れるな」って。お修法でもそうでした。「三度の無理な願いはかけてくれるな」
って出ました。お父さんはお修法と同じことを言いました。

いろんなことがありました。ほんとにいろんなことが、数えきれないほどあ
りました……。

2. むすび

この生活史には、谷尾かよがこれまで歩んできた人生航路のうち、主として信念体系にかかわる側面が表出されている。そこには、彼女が彼女自身の意味世界を形成していくなかで、自身史に常に彼女らしい意味づけをし、ライフコース上の新しい状況に対して主体的に適応してきたその実相が素朴ながらも赤裸々に表現されている。そして、口述時点におけるその意味づけや適応に影響を与えたものは、修法に代表される円応教の信念体系と、「親」である西垣秀子であった。以下、若干の考察を加える。

かよ自身の回想による入教の動機は、①娘時代からの病弱、②夫の放蕩、③西垣秀子との継続的な援助的関係である。このうち、②と③は繰り返し口述され、新しい信念体系受容の理由として理解することができる。

本事例の新しい信念体系受容過程についての回想は、まず自身の苦悩の状況から語られている。これには、教外者である調査者に、自己の信仰する宗教がもたらすおかげを理解させたいという布教者としてのモチベーションが垣間見られるのであるが、しかしそれは同時に彼女にとって、真実であると認識された現実でもあった。布教師谷尾かよは、「真実な体験告白ほど人の心を動かす」という布教に関する命題を既得していたからである。かよの語った初めの状況は、病気によって奪われた青春時代の長期にわたる苦悩であった。そして次に語られたものは、より大きな苦悩を予言する教祖の霊導による教文であった。これはまもなく訪れる苦難の伏線としての役割を担っている。教文は偉大な霊力をもつ教祖から由来する変更不可能な、権威ある啓示であった。はたして、その後の彼女の生活史はこの最初の教文が成就する過程となった。結婚後、夫の放蕩は「のたうちまわるほどの地獄の苦しみ」をかよに与えた。しかも「教文によって」、夫を責めたり、苦しみを近親者に訴えることはできなかった。「霊」からの命令は、「見ざる、言わざる、聞かざる」で「なにも言わずに耐える」ことであった。「霊」は、「行」をもって彼女からさらに時間的・精神的余裕を奪い、信念体系受容への道程へ彼女を集中させていった。教会への一年間の日参行は、「一番辛かったこと」としてかよの脳裏に刻みこまれている。

また親教会への一年間の参拝を通じて、「信じ切ること、行じ切ること」を体験し、信仰の先達からのはげましのありがたさを味わうことができた。「夫と自らの悪因縁を断ち切り、それを子供に継がせないために」、かよは必死で行を行じた。しかし、夫の道楽による家族危機は依然続いていた。かよの内部は夫への敵対感情が渦を巻いていた。そんな、誰にも言えない胸の内を受け止めてくれたのが、西垣秀子であった。かよは、修法や行を通じたかかわりのなかで、秀子にはどんなことでも打ち明けることができるようになっていた。そして秀子の前で「腹いっぱい」泣いた。秀子は「何にも言わずに」、かよが「泣いてこぼす愚痴を一心に聴い」た。そうすると「胸がすっきりして」、夫の前では「嫌な顔を一つもせず」にいることができた。このことは、他の者に伝えることは決してなかった。このような秀子とかよの関係は、長期間継続した。このようにして、教会はかよの「家」になっていった。円応教の信念体系は確実に受容されつつあったのである。

かよは二人の息子をもった。彼女の次の課題は子供の就学であった。本事例においては、二人の息子への愛情やプライドをおりませながら、円応教の信念体系による意味づけによってこのライフコース上の危機に適応しようとする姿が描かれている。それは具体的には、教会への祈願行という行動となって表れている。その後の長男の地元への就職、次男の立ち直りなどを彼女は「おかず」として肯定的にとらえている。

その他、現在の家事と教会活動との時間のやりくり、恵まれた境遇、父親の病気と死などについても、それぞれ信仰者としての意味付与のありようが表されているが、それらはおおむね肯定的にとらえられている。我々はここで、信念体系受容による照準枠の変更の実例を確認することができる。

本事例の特徴は、かよの転機における意志決定の際には必ず超人間的な「霊」からの啓示が関与していることである。かよの家庭や教会での役割認知や遂行の際にも修法が介在している。このようにかよの信仰者としての自律化を促したものとしては、秀子との相互作用と修法の教文があげられよう。

注

- 1) 拙稿「新宗教の地方伝播・浸透・定着とその要因——立正佼成会茨城支部の事例——」(森岡清美編『近現代における「家」の変質と宗教』新地書房、1986年2月) 312頁～315頁参照。
- 2) 中野卓『口述の生活史』御茶の水書房、1977年、同「第一部のおわりに」(中野卓編『離島トカラに生きた男・第一部』御茶の水書房、1981年)参照。また生活史研究の歴史的概観については桜井厚や有末賢らにより手際よくまとめられている。
桜井厚「社会学における生活史研究」(『南山短期大学紀要』10、1982年)、同「付論 生活史研究の課題」(W. I. トーマス、F. ズナニエツキ『生活史の社会学——ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』御茶の水書房、1983年。
有末賢「生活史研究の視角」(『慶応義塾創立125年 記念論文集・法学部政治学関係』1983年)。さらに渡辺雅子の研究に示唆を受けた。渡辺雅子「新宗教集団発生の萌芽期における集団アイデンティティと信者集団の形成——浜松市の自教会を事例として——」(『続 都市社会の宗教』東京大学宗教学研究室、1984年)、同「ある女性祈禱師の生活史——巫者としての自立と人生の構成——」(『明治学院論叢』382『社会学・社会福祉学研究』70、1985年)。
- 3) 本稿の事例の円応教では、教団への加入を入信ではなく「入教」としている。従って、本稿でもこの用語を使用した。
- 4) 前山隆「適応ストラテジーとしての擬制親族——ブラジル日本移民における天理教集団の事例——」(信州大学人文学部『人文学論集』12、1978)、同「ブラジルの日系人におけるアイデンティティの変遷——特にストラテジーとの関連において——」(『Latin American Studies,』No.4, The University of Tukuba 1982年)参照。
- 5) 円応教「日課動行文」のなかにある、「おつとめ」のための経本のようなもの。独特の節回しで唱える。
- 6) 円応教のいのちともいうべき修行。多くは布教師と信者またはクライアントが向き合って拝み合うかたちをとる。『教義概要』によれば、両者とも教祖の霊導を信じ念ずることにより、両者の過去と現在の行為と品性について懺悔し、人格の修練に努めることとされている。実際は拝み合っているうちに、布教師の手先や体が動

き出し、リズムカルな調子のことが発せられる。これが「教文」である。すると、信者の体も揺れてくることがある。このような身体的表現は、普通は霊の表現であるとされている。この「教文」により、クライアントのもつ問題や、過去、未来のことを暗示的、象徴的に指摘する。

- 7) 播磨朝一郎。大阪の永和教会教会長で教団事務総長兼務。播磨は日下正子西陣教会長の「親」であり、その関係で当時西陣教会の地方拠点であった飯南布教所に布教に来ていた。
- 8) 和歌山街道沿いにある、三重県と奈良県の県境に位置する峠。森地区より約16キロ西方の地点で難所であった。
- 9) 布教師が信者の体を撫でたり、さすったりすること。
- 10) 教会の神殿に上げた線香の灰のこと。怪我や腹痛・頭痛などに効能があるとされる。
- 11) 『教義概要』によれば、日常すべてのことを修法によって自覚反省懺悔を行うことは、繁雑でやっかいなので、直観力・靈感力によって五感六根を通さないで感じられるものを「うかび」といい、行動するときの基とする、とある。ちなみに教祖深田千代子は、着替えや入浴など生活万般にわたって何事も「うかび」でなければ行動しなかった、といわれる。
- 12) 全寮制の「スパルタ教育」で知られる私立高校。第一高校は三重県上野市、第二高校は三重県一志郡白山町にある。
- 13) 教団の「布教師検定規定」および「布教師養成講習内規」によれば、布教師には、司祭師、司教師、司導師、円導師、応導師、智導師、覚導師がある。布教師養成講習は十四泊十五日で、課目は円応教史、教典、教義、心理学概論、祭典作法、修法、布教講話、奉仕行などである。

〔付記〕

円応教飯南教会と筆者との出会いは、筆者が成城大学民俗学研究所のプロジェクト研究「山村生活50年・その文化変化の研究」の昭和59年度調査に参加し、同地区を訪れたことがきっかけとなっている。そこで円応教が同地区人口の一割以上の信者を獲得し、地域社会に定着しつつあるのに関心をもち、個人

的に同教会を訪問するようになった。西垣秀子・勝教会長夫妻をはじめ同教会の皆様には、そのたびにあたたかく迎えていただき、言い尽くせないほどの世話になった。ここに感謝申し上げます。

また本稿を作成するにあたっては、谷尾かよ氏には格別の御協力を賜った。厚く御礼申し上げます。さらに、本稿は個人的な事柄を内容とするにもかかわらず、実名で発表することを快く御許可くださったことに、重ねて心より感謝申し上げます次第である。なお本稿の固有名詞はすべて実名であることをあわせて明記しておきたい。